

にしか受取り得ないのであるが、後者では、あの「リ・リ・リ・リ」というなき声はつきりときこえる感があるのである。「梅の落葉に降る雨のさむき夕に」なっている「こほろぎ」は、どこにならぬのか、まったく不明であるが、「笹の菜など」と単に想像にすぎないのかかわらず、それは「こほろぎ」の存在と体勢と、そのうごきまでも、あくまでいきいきと描けていると言つてよからう。元来、厨と「こほろぎ」のとり合せなどは俗にながれた構想と考えられるものであるが、これほどの作となれば、それは少しの抵

## 「ダダの運動」に就いて

主として歴史的観点にたつて

平 田 裕 康

戦争、革命、発明、発見、こうした事象は人間の社会、生活、経済に大きな影響を与える。大きな戦争の後には、その戦争に何らかのかたちで巻きこまれた地域、あるいは国に、その影響を受けて、社会的経済的な変化がおこっている。

今世紀には入って二つの世界大戦がおこったが、この二つの大きな事象は、あらゆる面で、世界的な規模において影響を与え、世界各国にわたって、大きな変化、というより変動がおこった。その変動は、ある地域では国土にまで及んだものもあるが、そうでない地域でも、政治的、社会的、経済的に大なり小なり何らかの変動が見られる。

この事象による影響からおこる変動は文学、芸術の面においても

抗をも感じさせないのである。

(付言) 編中言及の文献のうち、「長塚節全集」は昭和四年十一月春陽堂刊行六巻中の第三巻である。また「長塚節研究」は齊藤茂吉編、昭和十九年五月筑摩書房刊行上下二巻である。

なお、この論文は日本大学文理学部にかける「文芸作品鑑賞」講座担当の筆者が昭和四十一年四月と五月にわたり三回連続講義の内容をまとめたものである。

同様である。戦争という、血で血を洗う、のっぴきならない真剣な事態に直面して、生死をかけた極度の興奮の状態からようやく解放された時、人間の生活する社会は、戦前の平和な状態にかえるためには、若干の時間が必要である。しかし、その間すべてのものが停滞しているわけではない。人間が生存し、共同体として生活を続ける以上、時間とともに、何らかのかたちの動きが、すべての領域にわたって行われる。文学においても、これと同様な現象があらわれていることがみられる。

そして、この戦争後の状態の特色ともいえるものは、ある程度絶望的でもあり、ある程度建設的でもあるということである。ということは云いかえれば、混乱期であると評することもできるかも知れ



ないが、その中には、かなり急進的な要素もみられ、新しい秩序が生まれるためのアンチテーゼであるということが出来る。それだけに、個々の事象の目的はひじょうに掴みにくく、またしばしば見落すおそれが無いでもないが、系統だてることの困難をあえておこなうならば、じゅうぶんに研究の対象となり得るものである。というより、シンテーゼの要因として、あえて困難をおかしても研究しなければならぬ対象である。

文学の歴史とは、単なる作品の目録でもなければ、一覧表でもない。文学の歴史は、言語を媒体とする表現形態を通じて思想の動向をさぐり、あるいは芸術の形態の流れを見いだして、その推移を系統づけるものである、と信じる。

著者と作品が何年に発表され、あるいは事件がいつ生じたか、などの記述は、いかに詳細に明瞭に報じられていても、それは単なる年代記にすぎない。とはいえ、文芸作品なくしては、文芸思想も、運動もありえないのであるから、できるだけ適確にその動向や推移の状況の製産者である著者について、その生存の前後についてのすべての状況の実態の研究を無視することはできない。というより、それは必要なことである。

誤まった情報は応々にして誤まった認識や判断をさせることができる。正しい認識や判断をするためにこそ、できるだけ多くの資料の集収が必要になってくるわけであるが、同時に、すでに幾十年、幾百年、あるいは幾千年も過去のものであるところのこの資料の集収とその正邪の考証それ自体が、しばしばひじょうに困難をとまなう作業ではあっても、文学の歴史の一部門をかたちづくることになってくる。

社会の進化の過程においておこる変化は文学の上に影響する。大きな發明や、経済的な変動、革命や、戦争などは文学に強い影響をもたらし。

こうした社会的な変化がおこった時、それ以前の文学作品や作家がいつの間にかあまりかえりみられなくなり、かつてはその精神的かてを与えていた作家も、すでに前代に属する作家であるかのようにみえてくる。こうした作家たちは、すでにその社会的変動期以前のものであって、その活動によって現在の人々に与える何物ももたなくなる。また大衆もこの作家たちに求めようとはしなくなる。この社会的変化によって生じた不安定感、これからおこる新しい欲求や疑問に対して満足な解答をあたえることは、この作家たちはすでにできなくなっている。

今世紀にはいって、第一次世界大戦、第二次世界大戦という二つの大きな戦争に遭遇している。ここで、この二つの戦争の中間にあたる一九一四年から一九二〇年の間に、フランスの文学界にどんなことがおこったかを検討してみよう。

第一次世界大戦直前のフランス文学界を俯瞰してみると、小説の分野においては四人のアカデミ作家が君臨していた。すなわちアナトール・フランス (Anatol France)、ピエール・ロチ (Pierre Loti)、ポール・ブールジェ (Paul Bourget)、モーリス・バニス (Mauris Barres) の四人である。思想の分野では、ヘルグソン (Bergson) が勢力をふるい、劇作ではエドモン・ロスタン (Edmond Rostand) が天才的作家としてうたわれた。詩では、一八七二年に生れたポール・フォール (Paul Fort) があつた。

やがて戦争が終って平和がきた時、人々は家にかえり、日々のパンを得るための労働を求めて苛酷なたたかいを強いられる時期がや



ってきた時、さきの大家たち、すなわち、フランス、ロチ、ブルジョ、パレスたちはすでに人々にとって、神の如き存在ではなくなつた。人々はその偶像を他に求めた。これらの大家たちは、もはや人々にじゅうぶんな精神のかてを与えることはできなくなつていた。

一九一四年、第一次世界大戦の終結によって多くの若者たちが復員した。この若者たちは、芸術の殿堂にたてこもる大家たちに満足することができなかった。そこに失望が生れ、反抗が生れ、否定が生れ、そして行動と運動が生れた。必然的に、新しい何かを、いままでとは異なる何かを発見し、創造しないではいられなかった。

第一次世界大戦と第二次世界大戦との間の時期におかれた若い作家たちが、こうした不安の中で追究し、行動したものの一つがシュルレアリスム (Surrealisme) の運動である。この運動は一九一八年におこり一九三九年までつづいた。

この時期の、これら若い作家たちの精神、思想、行動を研究することは、二十世紀前半のフランスの文学研究にとって重要な仕事である。中でも一九一四年以後、第二次世界大戦という大事件がおこるまでの間に、最も活ばつにおこなわれた文学運動であるシュルレアリスムは、近代文学史の中に大きな転換が行われる過程の一部として、かなりの比重をもっているといわなければならない。

シュルレアリスムを詳細に研究しようとするならば、いきおい、キュビズム (Cubisme) や未来派 (Futurisme) にまでさかのぼらなければならない。若い画家たちや、アポリネール (Apollinaire) の若い讚美者たちのあいだに、いかなる理由でこの運動がおこったか、を探究しなければならない。敗戦で瓦解したドイツで、なぜこうした運動がおこるべくしておこったかを研究しなければならない。トリスタン・ツァラ (Tristan Tzara) によって始められたダ

ダの運動 (Le mouvement Dada) の過程も探究されなければならない。

この稿では、ダダの運動についてのべ、この運動に参加したルイ・アラゴン (Louis Aragon) にも触れたいと思う。

ダダが生れたのは一九一六年である。というより、ダダと名命されたのがその年である。もしそうだとすれば、今年 (一九六六年) は五十年になることになる。

「Je déclare que Tristan Tzara a trouvé le mot DADA le 8 février 1916 à 6 heures du soir; j'étais présent avec mes douze enfants lorsque Tzara a prononcé pour la première fois ce mot qui a déchaîné en nous un enthousiasme légitime. Cela se passait au Café Terrasse à Zurich et je portais une brioche dans la narine gauche»

Jean Arp

ロマンティスム (Romantisme) もサンボリスム (Symbolisme) も正確なたん生の日づけはわからないが、ダダのたん生はジャン・アルプの言葉によれば、一九一六年二月八日午後六時頃ということになる。チューリッヒのカフェ・テラスで、トリスタン・ツァラがこの名「ダダ」を発言した。その時、アルプは十二人の自分の子供といっしょにそこにいた。そして、この言葉をきいて、プリオシュ (フランスのパンの一種) を右の鼻のあなにつっこんだ、というのである。この時ツァラがいった「ダダ」が、やがてはわれわれの中にすばらしい熱狂をまきおこす運動の正統の名となったのだというのである。

ここで、はなはだあやしく思われることは、十二人の子供と、鼻



のあなにつっこまれたパンであるが、十二人は単に想像だとして、パンは手でちぎった破片であるとしても、鼻のあながよほど大きくなければならず、これもすこし誇張があるとしか考えられない。しかしアルプの言葉は、多くの史家によって支持をうけているようである。若い人々によって爆発的にうけ入れられたこの運動の仮定としては、いかにもうなずけそうである。

チュリッヒにおいて、偶然に命名されたこの運動は、アメリカとヨーロッパにおいて同時におこっている。戦後かなりラディカルな思想がこの両地域におこった。まずニューヨークにおいてフランシス・ピカビア (Francis Picabia) とマルセル・デュシャン (Marcel Duchamp) が手を組んだ思想が、ツアラの観念、アルプの観念、ユロー・バル (Hugo Ball) の観念、ユルサンベック (Hulsenbeck) の観念に合流した。

これがフランスにはいつてきたのは一九二〇年の始めであるが、フランスに影響を与えたのは、やっと一九二二年頃になってからのことである。

ルイ・アラゴン、アンドレ・ブルトン (André Breton)、フィリップ・スウポール (Philippe Soupault) の三人の若者はパリで、雑誌『Littérature』を企画して、その第一号を一九一九年三月に発行した。その後『ダダ』の運動に共鳴してこの若者たちは『Lettérature』を『ダダ』の機関誌とした。

精神的な価値はすべて否定する。ダダの倫理、ダダの美学は要するにここからはじまる。この運動が文学だけではなく、あらゆる領域にしんとうすれば、実際の破かい力によって精神の刷新を行うことができる、とダダイストたちは考えていた。

『Qu'est-ce que c'est beau? Qu'est-ce que c'est laid? Qu'est-ce que c'est grand, fort, faible? Qu'est-ce que c'est Carpentier, Renan, Foch? Connais pas, connais pas, connais pas, connais pas.』

—Ripemont-Dessaignes

美とは何であるか? 醜とは何であるか? 偉大、強力、劣勢とは何であるか? カルバンチェ、ルナン、フォッシュとは何であるか? 知らない。何も知らない。リブモン・デセーニユはこう書いている。

ダダの行動は不真面目でありしかも無関心である。その先導者はピカビアがつとめることが多かった。こうした破廉恥な運動はながくは続かなかった。

アラゴンとブルトンは一九二一年にモリス・バレス (Maurice Barrès) を告発したが、それは「精神の安全保証に対する罪」によってであった。しかしこれがダダと別れるきっかけとなり、やがてダダの運動からはなれてシュルレアリスム (surréalisme) には入ってゆくことになった。ダダの運動は、事実上この年におわった。

ダダについては、二つのこととなったものがあって、はっきり区別しなければならぬ。その一つはダダの精神であり、他の一つはダダの運動である。この二つは時に同一視されるとはいえ、明かに別々のものである。とジャック・アンリ・レヴェック (Jacques-Henry Lèvesque) はのべている。

『Il faut distinguer, lorsqu'il s'agit de Dada, deux choses différentes, bien qu'elles se soient identifiées à un certain

一九二一年にダダは終った、とされるものは、ダダの運動であつて、ダダの精神ではない。

ダダの精神は、ダダの運動の以前から存在し、以後にも存在する。ダダという名よりさきに生れたダダの精神は、ダダの運動が終末を告げて後も、雑誌オルブ(Ober)の中に存続する。この雑誌は一九三五年まで続いたが、主幹ジャック・アンリ・レヴェックはきわめて自由に著者を集めており、したがって主張傾向の異つた著者がいるわけで、最も対立したもの、特異なものなどある中で、最もダダに近い著者にはジャン・ヴァン・エッケラン(Jean Van Heeckeren)がある。

一九二一年に終つたダダの運動については、それから四四年をへた今日、ミシェル・サヌイエ(Michel Sanouillet)の学位論文に再び登場してくる。この論文は「Dada a Paris」と題する六四二ページのものであるが、ひじょうな力作である。サヌイエはあらゆるものを見、あらゆるものを読み、あらゆるものを保存し、ダダの痕跡をのこすものはすべてたんに調べ、参考にした。

その中には、かつてパリのダダリストたちが集つた、古いオペラ通りの酒場セルタ(Certa)で見つけた小さな紙片のようなものもある。この通りのかいわいの情景は、アラゴンが、その代表作の「Le Paysan de Paris」の中に詳しく描写してゐる。

サヌイエは未発表の手紙を二百通ばかり集めてゐる。その手紙の中にはピカビア、ツアラ、ブルトン、マックス・ジャコブ(Max Jacob)、ルヴェルディ(LuVerdy)などがある。またかわつたところでは、一九一九年にアンドレ・ブルトンがジャック・ヴァンメン

(Jacques Vaché) の「Lettres de guerre」の序文をバレスに依頼した」といふようなものなど多く語られている。

サヌイエはこの論文の中で、ダダの運動の歴史についてはおびただしい報導を行っているけれども、多分、その精神については明確に把握してはいないようである。とはいへ、その時代におけるダダの占める位置はまことに適確にとらえており、シュルレアリスムがおよぼしたよりも、ダダの方が大きい影響を一般に与えていることを強調している。

すでに亡んだダダは、サヌイエによって、ふたたび吾々の目の前に開展された。ダダの再発見といえよう。

ダダからシュルレアリスムへ、やがて共産主義へ。アラゴン、ブルトンの先導する第一次大戦後の若い世代の作家たちの急進的な活動は全世界にすくなからぬ反響をおよぼした。しかし間もなく第二次世界大戦がまっていた。第二次は第一次よりもなお世界的であった。原爆が現実におとされた。戦後二十年の今日には人工衛星が地球をまわり、テレビの宇宙中継が行われた。サルトル(Sartre)、マルセル(Marcel)が実存主義をとなえている。かつてのダダリスト、アラゴンはわずかに「Les Lettres Françaises」の主幹として今なお健在である。(一九六六・五)

#### 参考資料

- G. Lanson et P. Tuffrau: Manuel Illustré d'Histoire de la Littérature Française.
- Jean Larnac: La Littérature Française d'aujourd'hui.
- Louis Aragon: Le Paysan de Paris.
- "Les Nouvelles Littéraires"
- "Les Lettres Françaises"
- "Les Nouvelles Revue Française"